

ロシア史研ニューズレター

ОБЩЕСТВО ИССЛЕДОВАТЕЛЕЙ ИСТОРИИ РОССИИ

No.88

January 2013

ロシア史研究会 2012年度大会 閉幕



(大会二日目 共通論題 「祖国戦争」200年に寄せて一軍隊と社会の様子 撮影 野田岳人)

【2012年度総会について】

総会は、成立要件を満たしていることを確認して開会しました。2012年9月23日現在の会員数は259名（うち休会者7名）でした。規約第4条では、会員総数の5分の1の出席で総会が成立すると定めており、「休会制度内規」第4項に従って会員数から休会者数を除くと、定足数は51名となります。総会開会時の出席者は44名でしたが、この他に37名の委任があったので合計して定足数を超えました。

冒頭で議長に下里俊行氏を選出し、続いて豊川浩一委員長が2011/12年度の活動報告を行ないました。今年度例会は7回開催され、ニューズレターが4号刊行されました。雑誌『ロシア史研究』は89号が2012年1月、90号が同年6月に刊行されました。会計報告は松村岳志氏が行ない、会計幹事の土肥恒之・鈴木健夫氏による監査報告（当日は土肥氏のみ出席）とあわせて承認を受けました。

続いて土肥氏が、ロシア史研究会50周年記念企画『ロシア史研究案内』が2012年10月に彩流社から刊行された旨、報告がありました。

ついで、ICCEES2015年幕張大会への支援について議論がありました。はじめに大会組織委員会事務局長でICCEES日本代表の松里公孝氏から、大会招聘決定以来の経緯についての説明および協力要請がありました。次に、ロシア史研究会として、アカデミック・コーディネータや大会組織委員会への代表などに会員を推薦することができるかが討議されました。議論では賛成意見のみが出されたため、推薦を可とすることが拍手で承認されました。ついで、財政支援について討議されました。率直な議論ののち、「ロシア史研究会としての協力姿勢を示すという観点から、幕張組織委員会に資金100万円を寄付すること（できるだけロシア史研究会の若手会員の便宜のために用いてもらう）がやはり拍手で承認されました。（文責：事務局長 池田嘉郎）

【会計報告】

2011/12 年度ロシア史研究会会計報告 (2011.9.1～2012.8.31)

前年度繰越

ゆうちょ銀行定額貯金	1,000,000		
ゆうちょ銀行普通預金	1,523,228		
ゆうちょ銀行振替口座	5,508,764		
みずほ銀行普通預金	1,052,587		
現金	102,032		
合計	7,993,554	計	9,186,611

2011/12 年度収支

収入

一般会員会費	1,378,000	*	
雑誌会員会費	100,880		
雑誌売上	119,480		
情報学研究所	138,427		
広告収入	90,000		
ゆうちょ銀行利子	649		
みずほ銀行利子	233		
		計	1,827,669

支出

N L 関連	296,258		
雑誌印刷・発送	969,929		
名簿関連	54,075		
例会関連	16,615		
会計関連	35,268		
事務局関連	157,720		
ロシア史研究案内関連	83,896		
各種会費	30,420		
大会関連費	459,498		
		計	2,103,679

大会関連費 (11/12 年度) **-459,498** (赤字)

収入		支出	
非会員参加費	0	アルバイト代	54,500
懇親会費	286,000	非会員報告謝礼	60,000
祝金 (日ソ)	10,000	懇親会費	330,000
祝金 (ナウカ・ジャパン)	10,000	食事代	14,231
		事務	5,234

		印刷代	21,708
		会場代(清掃費)	20,090
		オルガン演奏代	50,000
		外国人報告者招聘費	182,895
		送料・手数料	2,600
		次年度大会調整出張費	24,240
計	306,000	計	765,498

次年度繰越 (2012.8.31)

ゆうちょ銀行定額貯金	4,000,000
ゆうちょ銀行普通預金	2,000,787
ゆうちょ銀行振替口座	1,680,044
みずほ銀行普通預金	1,175,766
現金	54,004

計 8,910,601

前年度繰越+収入 = 支出+次年度繰越=11,014,280

2011/2012 年度の収支 **¥276,010 の赤字**
(次年度繰越-前年度繰越)

* 2011/2012 年度分一般会員請求額 ¥1,461,000、納入額¥1,254,000(納入率 85.8%)

A 会員 134 名 (¥8000)、うち家族割引 2 名 (¥4000)、委員割引 11 名 (¥3000)、休会 2 名
B 会員 125 名 (¥4000)、うち家族割引 4 名 (¥2000)、委員割引 1 名 (¥0)、休会 5 名

【会計監査報告】

本頁は、一般公開のために編集されました(2018年10月13日)。
会計監査委員による監査の結果、問題ないことが承認されたことが掲載されています。また、会計監査報告原本は、事務局に保管されています。

【2012年度大会印象記】

ロシア史研究会大会に参加して

青木恭子（富山大学人文学部）

2012年度大会は、金閣寺、龍安寺、等持院などの名刹に囲まれた立命館大学衣笠キャンパスで開催された。一日目に行われた四つの自由論題では、唯一帝政期を対象とする畠山報告（「技術学校生徒の社会構成」）を聞いた。エリートではない中下層民を対象とする「初等後」教育については、教育社会史でもこれまで論じられることは少なかったように思うが、会場からは技術学校の運営母体や教育内容等に関する多くの質問が出され、この問題に対する潜在的な関心の高さをうかがわせた。なお、昨年度大会に引き続き、今年度も自由論題は四本だったが、もう少し報告数があれば…、とも感じた。

「祖国戦争200年」にあたる今年は、関連企画が各所で目白押しとなっているが、本大会でも共通論題「『祖国戦争200年』に寄せて：軍隊と社会」が組まれた。この共通論題で興味深く感じたのは、「祖国戦争200年」としながらもナポレオン戦争期のみ限定するのではなく、その前後を含めた長いスパンで「軍隊」について取り上げていた点である。田中報告（「18世紀前半ロシア陸軍の特質」）はピョートル1世期を中心に論じており、松村報告（「大改革期以前のロシア帝国国軍の精神」）はロシア帝国陸軍草創期からクリミア戦争の敗北までを視野に入れたものであった。最初は意表を突かれた感があったが、ナポレオン戦争を戦ったロシア軍の特質を解明するには、それが必要かつ有意義なアプローチであることはすぐに理解できた。

また、松村報告と池本報告（「アレクサンドル1世の世論＝社会政策」）では、近代的な「国民」が未だ誕生していない当時のロシアにおける「愛国」や「国民（の精神）」について考えさせられた。個人的にとりわけ面白く感じたのは、アメリカ独立革命とフランス革命を契機に近代的な軍隊（国民軍）への転換が起こったとされているのに対して、大衆の政治参加などあり得なかった農奴解放前のロシア帝国陸軍に、あたかも近代的な国民軍であるかのような「精神」が、既にその前から存在していたという論点である。軍事史は詳しくないので妥当性についての判断はできないが、あれこれ想像力をかき立てられた。

二日目の午後は京都御所にほど近い同志社大学に場所を移し、ロシア文学会、JSSEES、ロシア・東欧学会との四学会共同シンポジウム「リーダーとリーダーシップを作るもの」が開催された。各学会からそれぞれ一名ずつ報告者を立て、多様な視点から「リーダー」について考察するというもので、個々の報告はどれも面白く聞くことができた。ただ、四人の報告を総合して何か見えてくるものがあったのか、といえ、その点の考察はやや不十分だったようにも感じられた。



（大会二日目 四学会共同シンポジウム「リーダーとリーダーシップを作るもの」の様子 撮影 野田岳人）

2012年10月6日と7日、立命館大学（京都市）において、2012年度ロシア史研究会大会が開催された。私はこのうちパネル企画と共通論題に参加したが、全体を通じて、ロシア・ソ連史において一定の研究蓄積のある科学史や軍事史の分野に対し、新たな学問的視座と方法論を踏まえた研究報告が実施されるという、大変に興味深い大会であったように思われる。以下、簡潔ではあるが、所見を述べさせて頂く。

6日午後のパネル企画「科学とソヴィエト権力：対抗・協調・もつれ」

では、20世紀に東側の大国として擡頭したソ連の原動力となった科学（主に自然科学）の発達のあり方に関して、ソ連国内における科学の有した権威的な位置づけという独自性や、政治権力と科学の関係に注目した研究報告がなされた。特に、金山報告「科学とイデオロギーの狭間で一戦前期ソ連における物理学をめぐる論争の弁証法」は、スターリン体制下における物理学研究の詳細な学術論争を取り上げることで、公定イデオロギーと物理学理論の関係についての論争の内容及び論争を取り巻く政治的・社会的諸相について検討が進められた。そしてコジェヴニコフ報告「Science as Co-Producer of Soviet Polity（ソヴィエト政治の共同制作者としての科学）」は、ソ連社会の中で科学が優位を占めていたことの歴史的意義について分析した。またゲロヴィッチ報告「Innovation under Socialism: Formal Structures and Informal Mechanisms of Postwar Soviet Mathematics（社会主義における革新：戦後ソヴィエト数学のフォーマルな構造とインフォーマルなメカニズム）」は、ソ連科学における数学分野の著しい発達をユダヤ人問題と関連させて考察し、具体例として、数学者イズライル・モイセーヴィッチ・ゲルファンドの講義「ゲルファンド・セミナー」を取り上げながら、当講義の授業風景や学問的先進性などを紹介した。いずれの報告もソ連科学史への実体的理解に大きく寄与する内容であったと思われる。

7日午前の共通論題「『祖国戦争200年』に寄せて：軍隊と社会」は、祖国戦争に勝利したロシア軍に関して様々な角度から研究報告がなされた。中でも、池本報告「アレクサンドル一世の世論＝社会政策—ナポレオン戦争を背景として」は、アレクサンドル一世が提案した神聖同盟条約の精神的側面に注目して、祖国戦争を通じた（戦時）世論操作と立憲君主制改革の関連性を明らかにした。そして松村報告「大改革以前のロシア帝国陸軍の精神」は、祖国戦争でのロシア軍の縦隊戦術や散兵戦術の採用を、「国軍」としての精神的な諸特徴と結びつけて分析した。また田中報告「18世紀前半のロシア陸軍の特質」は、スウェーデン王国との戦いなどにおいて、西洋ではあまり多用されなかった竜騎兵部隊が、ロシア軍の編制で活躍した歴史的背景及び部隊運用の実態を紹介することで、ロシア軍の特質を明らかにした。近年、ロシア史学に限らず西洋史学の分野において、軍隊と社会と



（大会二日目 パネル「科学とソヴィエト権力：対抗・協調・もつれ」の様子 撮影 野田岳人）

いうテーマが取り上げられる中、祖国戦争がもたらした軍事史的意義に関して活発な議論が実施されたことは、とても貴重であった。もしも私個人の関心に引き寄せるならば、祖国戦争後の19世紀前半のロシア「国軍」がどのようにロシア「帝国軍」へと拡大・成長したのかという議論が加えられれば、更に興味深い議論に発展すると思われる。

7日午後からは、同志社大学に場所を移して、四学会共同シンポジウム「リーダーとリーダーシップを作るもの」が開催された。そして各研究団体・機関を代表する形で三浦報告(JSSEES)は「反乱と世紀における中庸の指導者—アレクセイ・ミハイロヴィッチ」、村田報告(日本ロシア文学会)は「1900-30年代のロシア文学におけるリーダーのイメージ」、池田報告(ロシア史研究会)は「革命期ロシアにおけるリーダーシップ：構想・制度・人物」、永綱報告(ロシア・東欧学会)は「ソ連人としてのプーチン—個性とリーダーシップ」と題して、それぞれ発表が行われた。いずれも個々の学問的特長を活かした洞察の深い議論が展開された。質疑応答では、独裁制を願うリーダー像とロシア国民との親和性、ソ連人イメージとロシア人イメージの相違について(ロシア人は変わらないという本質主義的な議論に帰結するのか否か)、また政治権力とは異なった、文学界の「オピニオン・リーダー」としての指導的役割の意義についての言及などがなされた。

本研究会大会および四学会共同シンポジウムに参加したことで、ロシア・ソ連研究の幅広い視覚と展望を改めて感じるとともに、個々の専門的なテーマを取り上げながらも、広く西洋史学や軍事史学への汎用性を示すような論点が共有されたという意味で、とても充実した大会であったと思われる。(了)



(2012年度大会初日立命館大学での懇親会集合写真 撮影 梶雅範)

【ロシア史研究会10月第1回例会の参加記】

高橋沙奈美 (日本学術振興会特別研究員)

2012年度大会の翌10月8日、京都の佛教大学(紫野キャンパス)にて、デイビッド・ウルフ氏(北海道スラブ研究センター)の司会のもと、インディアナ大学教授デイビッド・ランセル氏による報告「ロシア国家遺産・休養地の不動産開発事業者への売却と市民社会勢力の出現」が行なわれた。同報告は、近年モスクワ郊外で目につくようになった高級個人住宅群について、その発生の政治的・経済的背景を説明すると同時に、1990年代から氏が行なってきた住民への聞き取り調査をもとに、この動きに対する抗議運動を描き出す、きわめてインフォーマティヴかつタイムリーな内容であった。

ソ連時代、大都市郊外には川や池、林や草原など自然が豊かに残る広大な土地が、特定の所有者を意識させることなく、市民に開かれていた。これらは企業や工場が労働者の福利厚生を目的として維持する保養地であったり、コルホーズの共有地であったりしたが、多くの人々にとっては、川で沐浴を楽しんだり、キノコやベリーを集めたりして過ごすことのできる気軽に身近な休息の場でもあった。ところが、国営企業もコルホーズも解体され、民営化が始まると、これらの土地にそれぞれ所有者が付き、ダーチャや小規模な果樹園・家庭菜園としての利用目的に限って、売買可能な土地となったのである。地方権力者と結びついた開発業者は、土地の所有権をまとめて手に入れ、背の高い金属板のフェンスで囲い込み、富裕層をターゲットにした高級ダーチャやコテージを建設・販売して、巨額の利を得ているという。

報告ではモスクワ市近郊の6つの地域が紹介された。いずれの場合も、土地を長年共有してきた地域住民が精神的・物理的ダメージを蒙っているばかりでなく、考古学的に価値の高い遺跡や遺構、史跡、文化的景観が著しく損なわれてもいる。地域住民と考古学者などの専門家らは、こうした開発を阻止・制限すべく、権威ある専門家を招いたヒアリングを行ったり、連邦政府や大統領に訴えたりするなどの手段で、開発業者と地方行政に対抗している。

多くの地域で市民社会勢力が苦戦を強いられている一方、開発に制限を加えられる見込みが高いのが、ナポレオン戦争の激戦地であるボロジノ平原と、ロシア正教会で最も崇敬を集める聖セルギイが幼少期を過ごしたラドネジ村である。前者は、今年が祖国戦争200周年にあたることから、メディアの注目を集め、戦跡を破壊するような開発がネット上で広く批判された。この動きを受けて、プーチン大統領は史跡を保護する法整備を命じた。

セルギエフ・ポサド近郊のラドネジ村の保護には、正教会のスポークスマンである長司祭チャップリンをはじめ、宗教的ナショナリストと称される活動家たちが乗り出している。政府の最高権力との間に強いパイプを持つ彼らは、直接、大統領やモスクワ州知事に開発中止と「聖地」の保護を呼びかけている。

ナショナリズムに訴える主張が広範な支持を得るのは、高いフェンスで囲まれた高級住宅が、どこまでも開放的なロシアの大地という伝統的景観を破壊し、文化的・民族的アイデンティティにとっての脅威と感じられている背景があるとの指摘もなされた。

以上みたように本報告は、「巨大福祉国家」であったソ連の解体の結果としての民営化、ポスト・ソヴィエト社会における市民社会の形成、ナショナリズムと景観保護問題など、多くの論点を提示する刺激的なものであった。最後に、通常の例会と異なる会場を提供してくださった佛敎大学の渡邊保博先生（非会員）に、この場を借りてお礼申し上げたい。

【ロシア史研究会10月第2回例会の要旨】

2012年10月27日に、早稲田大学ロシア研究所との共催で、早稲田大学現代政治研究所にて、長興進氏（早稲田大学政治経済学部）の司会のもと、アレクサンドロ・スタンツィアニ氏（パリ社会科学高等研究院）による報告が行われた。タイトルは「War, Empire Building and Slavery: Russia, Europe and Inner Asia」である。スタンツィアニ氏は、ロシア史研究会ホームページに掲載した報告要旨を、実際の報告内容に即して当ニューズレター用に大幅に加筆修正してくださった。便宜を図っていただいた鈴木健夫氏には、この場をお借りしてお礼を申し上げる。（青島）

War, Empire Building and Slavery: Russia, Europe and Inner Asia

・ Tilly's well-known scheme classifies political entities in three major groups according to the ratio coercion/capital. This theory can be contested for coercion was important in Europe while capital played a major role in Inner

Asia, China, and Russia. In particular, this paper puts into evidence the role trade and capital played, together with the organization of the army, in the expansion of the Muscovy. It entered the major trade route connecting Far east Asia to Europe through Inner Asia; India and Persia to Inner Asia and Europe; Northern Europe and Russia to the Mediterranean. In all those cases, Russian merchants progressively took a central role and the State contributed to this by supporting infrastructure and also protecting trade from war. This achievement was reached to a particular link between military innovation, conscriptions and supplies. On this topic, one of the most widespread arguments in military history and in the history of Russia in general is that, before Peter and the Western military revolution, Russia had a limited military capacity and backward methods. Following this line of reasoning, the Western military revolution, namely: massive conscription, the recourse to the light cavalry, firearms, would have been introduced only very late in Russia. Unfortunately, this interpretation forgets two major aspects: first, that the western military revolution occurred long after Peter and was strongly influenced by the Russian conscription; second, most of the Muscovy expansion took place before Peter. In particular, on the Western front, in its confrontation with Poland-Lithuania, Moscow was pushed, because of the environmental conditions and of the equipment of its enemy, to extensively borrow from the European military art.

- Quite differently in the south and along the steppe frontier, Moscow long rested upon Mongolian tactics and weapons, duly corrected in view of an increasingly territorial power. If, in these areas there was nothing such a Western military revolution, this was so because firearms and the infantry badly conveyed to the steppe conditions. This explains why firearms were only gradually introduced in the Muscovy, then in Russia, and mostly on the Western front.

- At the same time, these military concerns were related to the political and social relationships between the State, cavalymen and estate owners, and the peasants. Muscovy had to face serious problems to feed the army and routing enormous quantities of corn on very long distances. Unlike contemporary China, the Muscovy did not try to solve this problem with “corridors” linking the regions of production to areas under military activity. This was so because, given local environmental conditions and the available techniques, the construction and the maintenance of roads were excessively expansive while the using of the road themselves depended on the season. As regards the eastern front, Moscow decided that one tenth of the harvest of central Russian areas had to be seized and stocked for military provisions.

- Granaries stocks resembled those which were in place in China since before the Ming, although methods of calculation were much less sophisticated than in China (these criteria will develop in Russia only towards the end of the 19th century).

- As in China, these granaries stocks were conceived not only as rampart against bad harvests but also as local banks, lending seeds and eventually cereals to local estate owners and peasants’ villages. But, unlike China, Muscovy leaders made appeal to private merchants only in extreme cases. in the southern front the Muscovy quickly adopted the principle that “the land nourishes the

soldier”, i.e., that the local resources were used to feed the local army. In order to encourage the service and reinforce the army, the Muscovite princes multiplied the granting of pomest'e in the border regions, in particular in the south. this implied that land ownership was no more a privilege of aristocrats and “hereditary” nobles. This fluid social boundary was the price to pay to colonize the steppe and create an Empire.

・ This confirms that Russian serfdom was much more flexible and locally embedded than usually stated and that, unlike China and India, eighteenth century Russia was able to face the rise of the West precisely because it did not rely on the market to feed and recruit the army.

【ロシア史研究会12月例会の要旨】

生田美智子著『高田屋嘉兵衛——只天下のために存おり候』合評会

小森宏美（早稲田大学）

2012年12月8日、早稲田大学において、生田美智子氏の『高田屋嘉兵衛——只天下のために存おり候』（ミネルヴァ書房、2012年）の合評会が開かれた。まず、評者の長縄光男氏ならびに畠山禎氏からの報告があり、その後、生田氏の応答、出席者からの質疑・コメントをふまえての議論が行われた。

畠山氏の報告では、生田氏のこれまでの主要な業績の二つを振り返った上で、その研究上の関心の連続性から本書において異文化コミュニケーションならびに外交儀礼に注目する理由が説明された。一方、長縄氏の報告では、1812年当時の日露関係に関し、ロシアが日本に接近を図った理由などにも言及しながら、西欧列強と非西欧諸国の接触という視点からも、本書の意義について指摘があった。

両評者とも、高田屋嘉兵衛についてはこれまでの多くの研究がなされてきたが、日露双方の、しかも多様な資料を利用した類書はほとんどないことに加え、本書が、北方史、日露交渉史、外交史という複数の分野にまたがる優れた業績であることを強調した。とりわけ、嘉兵衛トリコルドの交渉が成功した秘訣としてこの交渉過程で嘉兵衛が見せた知恵と工夫、情報収集能力の高さへの着目とその描写に秀逸さが光る。長縄氏は、嘉兵衛トリコルドの信頼関係が成功の重要な要因であることは否定すべくもないが、しかし、それに加えて本書でなされている境界人である嘉兵衛のスタンスからくるところの情報収集能力という説明は、非常に説得力のある形で、従来の「通俗的説明」を凌駕していると評価した。他方、嘉兵衛が収集した情報の質については更なる検証が必要ではないかとのフロアの指摘もあった。

情報収集に当たって重要な役割を果たしたであろうオリカーオリガに関して、資料に基づき可能な限りの推論を重ね、真相に迫ろうとする営為は本書の真骨頂である。研究であるならば厳密性が要求されることは言を俟たないが、本書では断定を避けつつも、従来ない新しい解釈が説得力をもって提示されていることは疑いない。嘉兵衛が短期間の間にかくもデリケートな交渉を行えるほどの高度なロシア語能力を獲得したとは考えにくい。では、なぜそれが可能になったのか。この疑問を解く鍵が、オリカーオリガという人物にあった可能性が本書では提示されている。この点についてはフロアから、オリカーオリガ女性説に対して別の見解も出され、また、イテリメン人であるらしいこの人物がロシア政府内部の事情にそれほど通じていたとする見方についても、違う見方も可能であるという指摘があった。

本書に刺激を受けて議論すべき問題をすべてここで取り上げることはできないが、最後に次の二つを挙げておきたい。ひとつは、方法論としての世界史の中の日露接近である。18世紀末、ロシアは日本に接近した。それには必要物資獲得という目的もあったが、ゴロヴニンの派遣に関して言えば、そもそも1812年当時のロシアが、ナポレオン戦争といういわば国の存亡の危機にありながらあえてそれが行われたのは、当時の日本近海に対する他の国々の関心に対するロシアの牽制のためであったという。いまひとつは、当時の北太平洋における国際貿易ネットワークの構築、周縁（境界）地域での人の移動と交流の実態である。日露関係とは言いながら、当然そこに登場するのは、いわゆる日本人やロシア人ばかりではない。境界地域に生きる人々の姿が描かれているのも本書の魅力である。

本書の魅力を理解し、問題関心を共有する参加者により率直な討論が行われ、充実した例会となった。

【ロシア史研究会委員会より】

＜『ロシア史研究案内』正誤表＞

すでにご案内のように、2012年10月にロシア史研究会編『ロシア史研究案内』を刊行しましたが、少なからずの校正ミスがありました。以下に「正誤表」を掲載するとともに、関係者の皆様に深くお詫び申し上げます。

『ロシア史研究案内』編集委員会

7 ページ	誤	初期の例会	正	初期の例会の記録
101 ページ	誤	溪内	正	溪内
110 ページ	誤	溪内謙 (1962)	正	溪内謙 (1962)
110 ページ	誤	溪内謙 (1970)	正	溪内謙 (1970)
117 ページ	誤	溪内 1962	正	溪内 1962
118 ページ	誤	溪内 1970-1986	正	溪内 1970-1986
185 ページ	誤	村地	正	村知
185 ページ	誤	婦人部	正	女性部
186 ページ	誤	婦人部	正	女性部
186 ページ	誤	溪内	正	溪内謙
188 ページ	誤	旅券 (パスポート)	正	国内旅券(パスポート)
192 ページ	誤	第1表を追加		
国	年度	男性	女性	
ロシア	1997	60.9	72.8	
アルメニア	1996	69.3	76.2	
ブラジル	1996	64.1	70.6	
エジプト	1995	64	66	
中国	1996	68	71	
インド	1996	62	62	
アメリカ	1995	74	80	

表1. 各国における平均余命：(Kiblitckaya2000:95)

195 ページ Kiblitckaya M.,(2001) Kiblitckaya M.,(2000)

195 ページ	in Melanie Ilič … in Sarah Ashwin ed., Gender, State and Society in Soviet and Post-Soviet Russia, Routledge.	
195 ページ	村地	村知
196 ページ	富永桂子(1998)	富永桂子(2006)
282 ページ	ペ・エヌ・ミリュコーフ	ペ・エヌ・ミリュコーフ
284 ページ	『ロシア十月革命の研究』	『ロシア十月革命の研究』
296 ページ	藤本和貴夫	藤本和貴夫
304 ページ	タクール	タタール
308 ページ	アレクサンドル一世	アレクサンドル一世
317 ページ	ペレストロイカ	ペレストロイカ
318 ページ	アレクサンドル	アレクサンドル
318 ページ	溪内	溪内
320 ページ	アレクサンドル二世	アレクサンドル二世
322 ページ	中嶋毅	志田恭子
322 ページ	アレクサンドル一世	アレクサンドル一世
322 ページ	ポヴォイチ	ポポヴォイチ
322 ページ	連農業	ソ連農業
328 ページ	1956年「会務担当世話人/委員長」欄に「江口朴郎会長、1986年まで。以後会長職は廃止」を追加	
334 ページ	溪内謙のページ記載漏れ 101,110 を追加	
334 ページ	辻義昌のページ記載漏れ 117,123 を追加	
335 ページ	中村喜和、最初のページの前のカンマを消去	
337 ページ	村知稔三のページ記載漏れ 185,195 を追加	

<『ロシア史研究』編集部より>

2013年秋発行予定の**93号**の原稿を募集しています。締め切りは**6月30日**です。投稿ご希望の方は、事前にその旨を編集委員の土屋までお知らせいただくと助かります。会員諸氏の積極的な投稿をお待ちしています。

<例会の案内>

2013年3月に下記の例会が開催されます。詳細は追って、メール・葉書にてご連絡いたします。ご参加をお待ちいたしております。

■3月の例会：**2013年3月30日15:00~**（場所：早稲田大学9号館304）
 書評会：河本和子『ソ連の民主主義と家族：連邦家族法制定過程1948-1968』有信堂高文社、2012年。
 評者：松戸清裕（北海学園大学）
 著者：河本和子（早稲田大学・中央大学・非）
 ふるってご参加ください。

<2013年のロシア史研究会大会>

2013年10月12日（土）～13日（日）にロシア史研究会大会（会場：明治大学駿河台キャンパス）の開催が予定されています。（会場については調整中であり、変更の可能性もあります。）大会に向けて、委員会では準備を始めました。共通論題については、同封のアンケート

ト用紙で事務局（下記の宛先）までご意見をお寄せください。自由論題とパネルについても、募集を開始したいと思います。自由論題については「題目、梗概（A4 一枚以内）」、パネルについては「題目、参加者・所属、梗概（A4 一枚以内）」を、4 月末日までに、メールないしは郵便で、下記の宛先までご応募ください。

<新会員の紹介>

2012 年 10 月-12 月の新入会員（1 名）をお知らせします。

舟川 はるひ（2012 年 11 月 1 日）

所属：ユーラシア研究所研究員

専攻・テーマ：日露戦争時におけるカムチャツカの防衛

<応募先>

ロシア史研究会事務局

Address: 〒162-8601

東京都新宿区神楽坂 1-3 東京理科大学理学部第一部教養学科池田研究室

ロシア史研究会事務局

（なお、当事務局住所は 3 月末日までとなります。それ以降については、HP に掲載いたしますので、ご確認をお願いいたします。メールアドレスは 4 月以降も利用可能です。）

ロシア史研ニューズレター
第88号 2013年1月18日発行
編集・発行 ロシア史研究会委員会
（担当：青島陽子）
〒162-8601
東京都新宿区神楽坂1-3
東京理科大学理学部第一部教養学科
池田嘉郎研究室気付
